



Hokkaido Lifelong Learning Association

ほっかいどう 生涯学習 Lifelong Learning

ホームページアドレス <http://www.hsgk.jp>

新しい自分との

出会いや発見がきっとある



(写真提供 三原和廣氏)

(撮影地 美瑛町)

目次

●年頭のご挨拶	2	●私の生涯学習	5
●これからの生涯学習を展望して	3	●随想32	6
●わがまちの生涯学習	4		



年頭のご挨拶

公益財団法人 北海道生涯学習協会

会長 宇田川 洋

皆様、新年明けましておめでとうございます。申年の輝かしい新春をお迎えし、皆様のご多幸を謹んでお祈り申し上げます。

当協会における公益目的事業に位置づけ実施しています生涯学習事業は、皆様のご理解とご支援のおかげで大きな成果を上げておりますことに対しまして、心よりお礼申し上げます。

北海道らしい生涯学習社会の実現のために、「だれもが、いつでも、どこでも」生涯にわたって学習を継続できるように①豊かな人生をおくる学習機会の提供、②技能のスキルアップを図る学習機会の提供、③地域や人づくりのための人材の発掘や育成を図る学習機会の提供、④生涯学習への情報提供と相談の四本の柱を立て、「生きがいづくり生涯学習促進事業」や「学習成果実践事業」、道民の学習ニーズや今日的課題に焦点を当てた「かでの講座事業」等を、札幌会場はじめ遠隔学習機を活用した地方展開を全道各市町村等のご支援をいただき多くの方々の参加を得て開催しております。

また、北海道教育委員会より受託している道民カレッジ事業は、昨年度から新たに「ほっかいどう学」大学インターネット講座としてリニューアルし、本年度も道内8大学のご協力をいただきながら制作した講座を、インターネットによる動画配信とDVDの市町村や高等学校等へ配布及びレポート作成学習会の開催など学習機会の充実に努めるとともに、上川管内南富良野町と檜山管内江差町の2会場では、「ほっかいどう学」地域活動推進講座を開催し、コミュニケーションスキルの向上を図り地域活動やまちづくりに貢献する人材育成をめざしております。

さらに、道民カレッジ事業に賛同する市町村、大学、団体等が実施する講座・セミナーを体系化し、道民の方々により確かな連携講座情報を広く提供しており、多くの道民の方々が道内のいろいろな場所で自分が学びたい講座を選び、自己の向上に向けて学んでおります。今年度は既に3,100講座を超え一層充実した連携講座となり、着実に生涯学習の学びが広がっていることを実感しているところであります。

また、当協会では、生涯学習社会の実現に向けた実践において、功績のある個人・団体を表彰し、その功績に報い、もって道民の生涯学習の振興に寄与することを目的に、新たに「生涯学習実践者奨励表彰」を設け、この度、3個人3団体を表彰したところであります。

公益財団法人北海道生涯学習協会といたしましては、今後とも道民一人一人の生涯を通じた自発的な学習活動を支援し、北海道らしい生涯学習社会の振興・発展に全力で取り組んで参りますので、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様の益々のご健勝とご発展をご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

生涯学習実践者奨励表彰

※敬称略

- ・森誘クラブ（道南圏道民カレッジボランティアの会）
- ・道北圏道民カレッジボランティアの会
- ・道民カレッジ・フレンズ十勝
- ・五郎部 勇
- ・林 芳男
- ・金田 英男

「これからの生涯学習を展望して」

札幌遠友塾自主夜間中学

代表 遠藤 知恵子

退職して5年、現在ボランティアとして「札幌遠友塾 自主夜間中学」に関わっています。生きる上で不可欠な基礎的学びの機会に恵まれなかった人たちに、学びの機会を提供しようと、1990年に立ち上げられた組織です。それから25年、以来多くの学びを求める人々が遠友塾を訪れ、400人近くが卒業しています。

戦中戦後の混乱期に、学ぶ機会を得られなかった大勢の人、障がいや病気のために学業の機会に恵まれなかった人々、あるいは学校教育に適応できずに不登校となり、引きこもりがちになる若者、外国から移住してこられた新渡日と言われる人々もいます。2010年の国勢調査では未就学者の人数は128,187人、国勢調査の項目には不備があり、実際はその10倍になるのではないかとさえいわれています。

「生涯教育」という言葉が登場してから久しくなります。科学技術の進歩、社会構造の急激な変化に伴って、生涯にわたる学びの必要性が認識されてきました。ユネスコのポール・ラングランが「生涯教育」を提唱したのは1965年、直後に日本でも波多野寛治訳によって紹介されています。語句の解釈で紆余曲折を経つつ、1990年「生涯学習振興法」（通称）が整備されるに至り、政策的に展開されてきました。今や「生涯学習」の言葉は市民のなかにも浸透しており、「いつでも、どこでも、だれでも」を合言葉に、行政の企画するものから民間カルチャーセンターまで多様な学習機会が提供されています。多くの市民がそれらの活動を通して生活の充実に役立っていることは喜ばしいことです。

しかし日本の場合、「学校教育の基盤の上に各人の責任において自由に選択し、生涯を通じて行われるべきもの」（臨教審最終答申1987年）とされており、その展開は、職業継続教育、あるいは時間的、経済的にゆとりある人々の趣味、教養等個人的学習に傾斜してきました。そこでは、学校教育体系の義務教育とされている段階、すなわち現代社会を生き抜くうえで不可欠な基礎的学びの機会を得られず、自らの生活を切り開くさらなる学びにも一歩を踏み出せないでいる人々も確かにいます。まさにユネスコの「学習権宣言」（1985年）がいう生存権としての学びが必要で、個人の自発的要求を待たず、より広く公的に条件整備がなされる必要があると考えます。

長年の要求運動に対し、最近ようやく国も動き出し、超党派で義務教育段階に相当する多様な機会確保に関する法案整備がすすめられ、次期通常国会に上程されるであろう段階にきています。義務教育レベルの学びを前提とするのではなく、それを含めた生涯学習の体系化が求められています。

遠友塾では週一回水曜日の夜、向陵中学校の教室をお借りして授業を進めています。現在受講生は57人、年齢は、20代から80代まで様々です。その学びを支援している70名ほどのスタッフも、まだ働き盛りの人から退職者まで多様で、受講生との交流、スタッフ同士の交流から多くを学び、共に学びあう場となっています。

「役所で書類に記入できるようになった」、「回覧板が読めるようになった」、「街中にあふれているアルファベットが目飛び込んでくるようになった」等々、学びたい一念で集まってくる受講生たちが自分を解放し、みるみる変わっていく笑顔を見ていると、これまでの生活の厳しさが思いやられると同時に、学ぶ熱意と喜びは純粹で、学びの原点を見る思いです。「生きる上で不可欠の学び」これこそまずは保障されるべき「生涯学習」の機会であると感じています。

わがまちの生涯学習

弟子屈町教育委員会

教育長 小林 俊夫

弟子屈町は、道東の釧路市から北に70kmほどのところにある人口約7,800人のまちで、摩周湖や屈斜路湖、硫黄山などの観光資源が豊かであり、原野の詩人「更科源藏」や第48代横綱「大鵬幸喜」のふるさととして知られています。

生涯学習事業の充実と社会教育の振興

町民が主体性をもって自発的に学習に取り組むため、町職員を派遣する出前講座や弟子屈高等学校の教員を講師とした専門性の高い「高校連携講座」の実施など多様な学習機会の提供により、気軽に参加し、楽しむことのできる環境づくり。また、行政や学校、PTA、社会教育等の関係者による「弟子屈町教育支援活動運営委員会」を設置し、授業や部活動への協力、図書の読み聞かせなどの学校支援活動とともに、学習機会の充実や学習情報の提供に取り組んでいます。

- ・青少年健全育成事業「摩周子どもおこと教室」、夏休みこども体験学習「古代に土器！土器！」（町内埋蔵文化財包蔵地の見学）など、多数の事業を実施

公民館、図書館活動の充実

公民館の役割は、町民ニーズに対応した学習機会の提供と地域の学習活動拠点であり「弟子屈町民大学校」の中核として、高齢者を対象として毎月異なるメニューを提供する「生きがい講座」や郷土の自然、歴史等について学ぶ「ふるさと講座」、子どもと高齢者が交流する「世代間交流事業」や公民館利用者団体の交流と成果を発表する場である「公民館まつり」を実施するなど、町民や利用者との連携により、町全体の活性化を図っています。

図書館については、読書活動の振興及び、地域の情報拠点として、移動図書館バスの運行とともに、町広報紙やホームページによる情報提供、インターネットを活用した蔵書検索、貸出予約などの図書館サービスの充実に取り組んでいます。

- ・各種公民館講座の実施（消しゴムはんこ作り、陶芸、自然散策、アイヌ刺繍、料理教室など）
- ・第7回更科源藏文学賞の開催（図書館）
- ・絵本の会おはなしはらっぱへの参画による各種事業の実施（図書館）
- ・児童生徒読書感想文コンクールの実施（図書館）

芸術文化活動への支援と振興

芸術文化活動では、文化協会への活動支援や今年66回目を迎えた弟子屈町総合文化祭開催のほか、近隣市町村で開催されるコンサートなどを鑑賞する「芸術鑑賞バス事業」を実施するとともに、地元の芸術家による講座など芸術にふれる機会の拡充を図っています。また幼児や児童のための「芸術鑑賞会」（人形劇や近隣大学吹奏楽部の演奏会など）や「児童生徒作品展覧会」等を開催し、子どもたちの芸術鑑賞の機会を確保するとともに、発表の場を設けるなど芸術文化に対する興味や関心を高める活動を行っています。

スポーツ活動の推進

スポーツ活動は、弟子屈町体育協会や文化・スポーツ少年団、摩周ふれあいスポーツクラブへの支援を行い、町民がいつでも、どこでも、スポーツに参加し、親しむことのできる体制づくりの強化に取り組んでいます。また、各種スポーツ教室の開催や学校施設開放事業を推進し町民が生涯にわたってスポーツに親しむ機会の拡充を図っています。

- ・美羅尾山ろくマラソン大会や摩周ウォークラリーゲームの実施
- ・各種スポーツ教室の実施（野球、サッカー、陸上、水泳、ニュースポーツなど）

私の生涯学習

道民カレッジ生 中 塚 豊

私は平成16年4月に仕事から解放されて「毎日が日曜日」になった。元来遊びに疎いので、余暇といっても「読書と晩酌」が関の山であり、そんな日が続けていて虚しさを感じてきた。「人と喋らない（考えない）ことによるストレス」だと思い新しい仲間を作ろうと平成17年4月「南区体育館卓球教室」へ5月に「南区緑苑（老人）大学」に入校しました。新しい仲間と学び、遊ぶ（パークゴルフ）ことにより楽しさと張り合いができました。平成17年9月に「道民カレッジ」に入学した。10月に「ほっかいどう学（平成17年）大学放送講座（演題 最初の日露の出会い）」講師札幌大学の川上助教授でした。平成18年3月に「道民カレッジ学士」（健康スポーツ）認定を得た、このときは嬉しかった。カレッジ生仲間が増え自分の称号は学士だけで、肩身が狭く思い単位を増やすために「大学連携講座」を走り廻ったこともあった。結果として称号が増え平成22年10月に「知事奨励賞」を頂いた。これは成果と思う。

沢山の講座を受講したが、今即決に内容を思い出してみると、数え上げることのできる講座は十指にも満たない。反省すると前半は「チョピリメモ取り＋漠然と学び＋出席」満たせば「手帳単位＋」する型、後半は「老化と物忘れ」の確認する座学でした。

『好きこそ物の上手』とは成らなかった話』、候文（そうろう文）を読み下したいと思い「赤れんが文書館」と「北海道開拓記念」で開催の「古文解説講座」に併せて6回受講した。準備OKと思い上級の「赤レンガ古文書読解夜学校」に入校した。テキストが配布され、読みなさいと指名されたが、四分の一も読めなく恥しかった。宿題がでたので「古文辞典」二冊買った。ところが漢字そのものがサンズイだかゴンベンだか、ニンベンだか判らない。一字を判読するのに「辞典から似た字を探す」為何時間もかかった。残るのは「疲れと絶望感だけ」身の丈に合わんことは止めるが勝ちだ。

道民カレッジで学んだ学友で「めだかの学校」を立ち揚げた。今年で5年目を迎えている。座学だけでなく全員参加で学習の準備を重ね、皆が納得するベースから始めた。全員が仕事を分担することを基本にしている。無理しない、自分で出来ること以上は負担しないし強要もしない。現在この方法が「生涯学習」として私には一番合っているように思う。企画立案段階から自分の意見を出せる。講座を担当する時は、資料作成のため本を読み、図書館や相手先（現地）へも出掛ける。この事こそが最大の学習になり、特に人前で話すことが脳の活性化に最適だと思う。ただ座って受講するのと違い、内容は記憶に残る。準備のため各地に出歩くことは健康にもよい。月一回開催される給食会（飲み会）では友情が深まり、お互いを尊重し合うことで生涯の学友を得たと思っている。

健康に留意し、「めだかの学校」を通して生涯学習を実践していこうと思う。



随想32

類例の不思議

アイヌの考え方では、天上界に神々が住み、地上界（アイヌモシリ）にアイヌ（人間）が住むと言われている。神々の世界には、例えばアイヌのユーカラ（叙事詩）の主人公として登場するオキクルミという文化神が存在する。そのオキクルミが天上界を抜け出す時に、天上界の稗（ひえ）を自分の脛骨（すね）に隠して持ち出したとされている。民族学者の故・大林太良先生は『稲作の神話』という本の中で次のように紹介している。

「オキクルミが天上界を抜出すとき、彼は、下界には沢山の魚や動物がいても、穀物はないだろうと考えた。そこで彼は一掴みの稗の種子を盗んで、自分の脛を裂いて其中へおし隠し、天上界から抜出そうとした。彼がまさに戸を出ようとすると、戸口の犬が騒ぎ出した。“…オキクルミが今稗の種を盗んで脛の中に入れて逃げ失せるところだ！”オキクルミは激怒して灰を掴んで犬の口に投げ入れ、“以後お前はもう物を言うことができなぞ！下界へ下りて鹿でも追掛ける手伝をしろ！”と叱った。それ以来、犬はもう口が利けなくなり、ワンワンと吠えるだけ…」とのこと。そしてこの話は西日本の《麦盗みと犬》形式の麦起源伝承と類似するという。

また、古事記には「スサノヲが、オホゲツヒメという名の体の中にいくらかでも食べ物をもっている女神のところにやって来た。…“何か食べさせてほしい”と頼むとオホゲツヒメは…自分の体の中のいろいろなおいしい食べ物を口から吐き出したり、鼻や尻の穴からどっさりとり出した…」という話が残っており、これも類例であろう。そしてインドネシアのセラム島のウェマーレ族の神話にも同様の類例が残るとの大林先生の指摘がある。

このような話を思い出したのであるが、類例の広がりのおもしろい不思議もある。本州のお歯黒と入れ墨型成年式が、本州～沖縄～台湾～インドシナ半島～ミャンマー～インドネシア～フィリピン～ニューギニア島まで類例があるということも最近聞いた。また、別の話もある。それは漆の木の分布であるが、本州・四国・九州～韓国・中国グループとは別の漆木の分布としてタイ・ミャンマー・ベトナムグループがあるというものである。

このように、神話の話の類例や諸儀礼の分布など興味つきない類例が数多くある。それを研究・分析するのが民族学や文化人類学であり、そこにこの学問の面白さがあるとも思われる。

(公財) 北海道生涯学習協会
会長 宇田川 洋

新入会員紹介(敬称略)

次の方々新たに賛助会員になりました。
今後ともよろしく願いいたします。

- ・秋山 雅行
- ・木元 希

ご寄付、本年も

ありがとうございます。

平成27年10月30日(一社)札幌ゴルフ倶楽部から社会教育事業に対する助成として、昨年同様に、本年も当協会にご寄付してくださいました。心から感謝申し上げます。

事務局からのお知らせ

当協会では皆様のご支援ご協力により各事業に取り組んでおります。

つきましては、年度末を控えておりますので、恐縮に存じますが、会費未納の方は早めの納入についてよろしく願いいたします。

編集後記

明けましておめでとうございます。

おだやかで良い年になりますようご祈念申し上げます。

昨年は、9月の台風18号低気圧の影響により大雨で、茨城県・鬼怒川では河川氾濫、11月にはバリ同時多発テロ事件があり、多くの方々が被害にあい悲しい思いをしました。そのようななかで日本中が歓喜したのは、やはりラグビーワールドカップ南アフリカ戦で24年ぶ

りに日本チームが勝利したことでしょうか？特に身長166cmの田中史朗選手のやさしい顔(?)に似合わないガッツさ！見習いたいですね。

当協会では、多くの道民の皆様の学習活動を支援できるように、今後とも各種事業を推進して参る所存ですので、皆様のご理解と暖かいご支援を賜りますようお願いいたします。